

MaaS アプリ「Izuko」を使って伊豆観光を実体験

「伊豆の旅行が、かつてないほど便利に。」をキャッチフレーズに、
2019年4月1日～6月30日の間、観光型MaaS アプリ「Izuko」の実証実験が行われた。
「現金社会」といわれ、どこか懐かしい雰囲気が漂う伊豆エリア。
スマホを使った交通の変革の芽を探るアプリ体験を、
現地で編集部が実際に味わってみた。

photograph: Kentaro Kase



「Izuko ワイドパス」の画面。
下方に電車が走る

【三島～河津編】

三島に降り立ち、アプリをダウンロード。いざ伊豆へ

新幹線を三島駅で下りた後、MaaS アプリ「Izuko」をスマホにダウンロード。支払い用のクレジットカード情報をひも付ける。

Izukoは伊豆地域でのルート検索と、電車や路線バスなどの公共交通のデジタルフリーパス機能を備えていることが主な特徴。早速、移動手段を検索し、2日間有効な「Izuko ワイドパス」をカード決済で購入した。パスを開くと画面下に赤い電車のモーションイラストレーションが出現。この動きがパスが本物であることの証明でも

あるという。

いよいよ旅の始まり。伊豆箱根鉄道でIzukoを使用してみる。画面を見せて、有人改札を通るだけ。切符やICカードと違って、どこかで落とす心配も少なそうだ。

バスとロープウェイを乗り継ぎ伊豆長岡で絶景を楽しむ

伊豆長岡駅からは伊豆箱根バスに乗って『伊豆の国パノラマパーク』へ。地方の場合、路線バスは後ろからの乗車がほとんど。乗車時に整理券を取り、降車の際、フロントガラス上部の運賃表示を確認しながら、該当する番号の運賃を支払う。行き先により料金が異なるので、観光客はその想定が難

しい。またICカードの利用ができない路線バスでは、主な利用客である地元の方々にとっても、小銭や回数券の準備は面倒なはず。バス経路である温泉街の宿泊施設を巻き込み、観光客の利便性向上を図る施策を含めた企画なども検討の余地はあるだろう。

実験期間中、Izuko ワイドパスの画面を見せると『伊豆の国パノラマパーク』のロープウェイ料金が100円割引に。ただ、支払いは現金のみ。今後のデジタル決済によるキャッシュレス化が期待される。

ロープウェイで約7分の空中散歩を終えると、そこに広がるのが富士見テラス。三島駅から約1時間、葛城山に広がる空中庭園から伊豆を一望す



①メールアドレスを登録後、名前と自宅の郵便番号、そして決済まで行う場合はクレジットカード情報を「Izuko」に入力する。使い方はトップ画面から行き先を検索して移動手段を選択。そのまま決済 ②旅情を誘う伊豆箱根鉄道の三島駅 ③『伊豆の国パノラマパーク』へは伊豆長岡駅からこの路線バスに乗り、伊豆の国市役所前バス停で下車



④バスの特典で一部観光施設が割引になる ⑤最大料金が約36度の急斜面 ⑥山頂展望台からの眺め。右下のデッキ部分が富士見テラス ⑦伊豆長岡の駅で、ラックにささったIzukoのパンフレットを発見 ⑧伊豆箱根鉄道グループは、アニメ『ラブライブ!サンシャイン!!』と提携したプロモーションを展開中だった ⑨Izukoでの検索結果どおり、定刻で修善寺行きの電車が到着



①路線バスは乗車停留所ごとに運賃が異なる。観光客にとっては小銭の準備も面倒だ ②緑深い山間を抜ける路線バスのルート ③我々を浄蓮の滝で降ろした後、走り去る東海バス ④⑤日本の名瀑100選に数えられる浄蓮の滝。この水を利用したわさび田が傍に ⑥わさび田に隣接した『丸岩安藤わさび店』にはTV番組『プラタモリ』も訪れた



る素晴らしい景色に出会える。これほどストレスなく公共交通の利用で足を延ばせれば、伊豆旅行の楽しさも一気に広がりが感じられる。そして行きたい場所を経路検索すると、対応する交通手段と時刻を表示。時刻表でいちいち調べる手間を省ける点も、スムーズな連携に一役買っているように思う。

修善寺から河津まで、 浄蓮の滝経由で天城越え

伊豆長岡駅に戻り、修善寺駅まで南下。Izukoを使って東海バスに乗り、目指したのは浄蓮の滝。このルートも平日の日中は、地元の方々の日常生活の足としての利用が大部分。途中、小学生の集団がバスに乗車。彼らの通学の安全をより確保する仕組みとして、「携帯電話や防災システムなどの生活に関わるものと運賃決済が一体化すれば、新しい価値を感じてもらえるのでは」などと思ってしまう光景もあった。里山を抜けると緑が深くなり、浄蓮の滝に近づいていく。途中、家族が車で山間のバス停まで迎えに来ているシーンもあり、路線バスが生活の生命線であることを実感。

30分ほどのバスの旅で浄蓮の滝の停留所に到着。石段で深い谷底まで下り、名瀑を前にすると瑞々しい空気を感じ、気持ちが洗われる。傍にある綺麗な水で育ったわさび田が美しい。より多くの人々が便利に足を運べる公共交通のシステムが実現すれば、伊豆の自然と文化の奥深さを国内外にもっと広めることもできるはずだ。

天城峠を越え、美しい山間を縫い、

伊豆急行線の河津駅へ。小説『伊豆の踊子』の景色を彷彿とさせる。サイクリングで伊豆の景色を楽しみたい利用者に対応して、路線バスはフロント面のバーに2台、車内に1台、計3台の自転車が積載できるようになっている。しかも追加料金なし。また河津駅の待合室には、さりげなく携帯電話の充電用電源が設置されていた。アプリを便利に使っているうちに、スマホのバッテリーが大きく目減りすることもある。こちらも嬉しいサービス。いずれもあくまで控えめなアピールにとどまっていて、少しもったいない気がした。

伊豆急下田駅に無事到着。 1日目の旅を終える

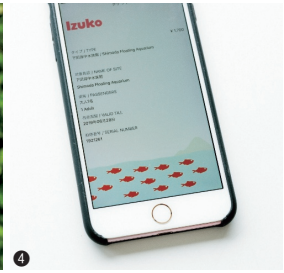
宿泊地である終点・伊豆急下田駅で下車。宿は歩いて5分ほどだが、小雨が降っていたのでIzukoを活用。駅から2つ目のバス停で下車すると、目的地はすぐ目の前。移動の多い1日だったが、伊豆エリアではここまで全ての交通機関をIzukoだけでカバー。切符を買ったり、現金を用意したりという必要がなく、荷物の多い旅行者には本当にありがたかった。しかも乗り降りの頻繁さを考慮すると、値段もとてもリーズナブルに感じられる。



⑪無事に伊豆急下田駅に到着 ⑫駅前の街並み



①下田で宿泊したホテルの目の前、下田港には遊覧船乗り場もある ②旧市街のレトロな雰囲気を感じるなまこ壁 ③Izukoによる乗合交通の経路表示。細線部分を車で移動。その先の水族館までの太線部分は徒歩 ④『下田海中水族館』など、観光施設用のデジタルバスの画面下には金目鯛が泳ぐ ⑤魚の餌付けショー。巨大なエイの仲間は見物客に大人気



⑥小川が流れ、風情のあるペリーロード ⑦昼食は下田名物、金目鯛 ⑧乗合交通の配車を予約すると、AIが最適ルートを割り出し、到着までの時間を知らせてくれる。あと1分(!)で到着予定 ⑨路上に貼られた乗降場所(約20カ所)を示す目印。遠くからはやや見つけにくい。またサービスエリアが旧市街に限られているため、観光客向けよりは地元の方の日常利用のほうが現実的な気がした ⑩乗合交通のサービスは10:00~17:00。ドライバーは地元のタクシー会社の方々が交代で務めていた

【下田市内編】

2日目は、乗合交通を使って水族館訪問を試みる

翌日は嬉しい晴天。和歌の浦に浮かぶ『下田海中水族館』を目指す。現地までIzukoを使ってAI オンデマンド乗合交通を体験してみることに。目的地を入力するとホテルから2、3分の街の中心部にある乗降場所まで移動する必要あり。指定場所近くになって配車を予約したところ、到着は53分後とのこと。時計を見ると9時過ぎ。どうやらサービス開始は10時からだったようだ。往路は車での移動を諦め、水族館まで10分強の道のりをゆっくり旧市街の散策を兼ねて歩く。

事前に『下田海中水族館』のデジタルバスを購入すると、入場料が400円割引かれていた。バスを入場券売り場で見せ、紙のチケットに交換。このひと手間は不要な気がするが、水族館側の入場者管理のために使われるのだろう。アクアドームペリー号の大水槽内に約50種、1万点もの生物が暮らす伊豆の海を再現。魚の餌付けショーでは、さまざまな魚たちが乱舞する

ドラマチックな光景を楽しんだ。昨日の山中で感じた静謐な清涼感とはまた異なる、活気ある伊豆の魅力を味わえる体験だった。

水族館が乗合交通のサービス外エリアのため、旧市街のペリーロードまで歩いて戻る。そして川沿いで目を引いた飲食店で昼食をとることに。地元出身のオーナーは東京で長く料理人を務めた後、今年5月にこの店を開いたばかりとか。Izukoについて何うと、今回の実証実験は知らなかったそうだが、「この辺りは交通の便がいいわけではないので、フリーパスのようなものが導入されると、地元民としても大歓迎です」と期待を寄せていた。

食事後は下田駅から帰途につくばかり。駅までは今回こそ乗合交通を利用すべく、店内でアプリを起動させて予約。するとあっけなく、あと1分で到着との表示。最寄りの乗降場所に急ぐと、すでにジャンボタクシーが停車中。広々とした車内で過ごした時間は、短い時間ながらとても快適だった。

旅を終えて

歴史ある温泉地域であり、自然が豊

かな伊豆は、人工的につくられた観光地やテーマパークとは一線を画し、素の美しさがある。しかし、訪問客の8割がマイカー利用ということもあり、多くの人が“伊豆の本来の価値”に触れるチャンスを逃しているともいえる。

今回、MaaSで公共交通を利用することによって、伊豆の山海の素晴らしさを存分に堪能することができた。周遊がもっと便利にシームレスになれば、これまでにない体験価値を提案できるのではないかと。そこに、テクノロジーを活用したシステムの導入が望まれる。MaaSは、観光拠点が点在し、さまざまな交通事業者が混在する伊豆を「観光価値の増大」という旗印のもとに集結させ、地元の商店や観光業者と一体になって「周遊」を促進する大きな一歩となるだろう。

デジタルとは無縁のように見えるこの地域が、デジタルを取り入れることによって活性化し、他の地域にはない“素の魅力”を保ちながら、さらなる発展を遂げることを期待する。それが全国のモデルケースとなり、国内外から多くの人が集まることを、願って止まない。